川柳 統計景況

田中二三四

(40)

"もろもろのコトがありそうな年が明け"

昔だつたら正月といえば、本当に新らしい年という実感が強かつたものであつたが、最近はめまぐるしく変化する社会の諸現象の中で、見ること、聞くこと、考えそして行動することにも変化が多い故か、正月といつても単に暦のうえでのことという感じが強いような気がするくらしのうえでも区切りがつかないように思う。ともあれ年が変つて1969年となる。この年は国際情勢、国内情勢などいろいろなずかしいコトが起こりそうな気がしてならない。

"初詣今年の無事を祈願する"

初詣に何を祈願するかというと、最近は交通安全のお守りをいただいて行く人が多いそうである。車に乗る人も歩く人もいつどこで交通事故にあうかもわからないような時代だから当然ではあろう。しかし当然とばかり言つていられないのではあるまいか。車の激増と道路のアンバランス、交通道徳の欠除等、人間の力で解決すべき問題がある。戦争はもうご免だというが、交通戦争といわれるこの頃、一歩外出すれば何かと尊い人命が失なわれるという恐ろしい現象は、全くもうご免である。

"日本人同志攻防安田城"

東大騒争、とくに安田講堂での学生退去についての、機動隊導入のニュースを見ていて涙が流れてしまつた。平和だといつている日本、しかも東京のド真中で戦争さながらの攻防騒ぎ。なぜ若い日本人同志で激しく斗い傷つき、憎しみ合わなければならないのだろうか。その結果は多勢の人が身心ともに傷つき、国民の税金による由諸ある名誉の殿堂が破壊されてしまつたという。何かが狂つているのか。これが現実のあり方なのか、新年早々よくよく考えさせられてしまつた悪夢のような1日であつた。

"ゲバ棒を奮う悴に唯がした"

ヘルメットにゲバ棒、反日共系全学連の考案？した斗争のいでたちが全国の学生に伝染してしまつたようで、おかげさまでヘルメット製造所は大繁昌笑が止まらないとか。ともあれこの学生達の親達にとつては大変な問題であろう。乏しい家計をやりくりして上京させ、卒業後を楽しみに大いなる希望をかけていたことだろうし、それが本来の勉強をホツタラかして石投げごつこをしているとしたらいつになつたら卒業ができ、そして待望の就職ができるだろうかと神様にお願いしても、解決はむづかしいことであるまいか。むかし流行歌に〃こんな女に誰がした〃というのがあつたけか。

"非常口はよく確かめてから泊り"

最近、大きな旅館やホテルなどの火災が多く、そのたびに多くの人命が失なわれてしまう。観光ブームによつて旅館はますますデラツクス化し、狭い土地にゴタゴタと林立している観光ホテル。一歩中に入ると迷路のような廊下が続き自分の部屋をさがし当てるのがやつとというところも多いようである。一旦災害があれば事故の起ることは当然のことかもしれない。ところで非常口は、名目的にあることになつているらしいが、実際は鍵がかかつていたり、針金でしばつてあつたり非常用には役に立たないそうだ。聞くところによればここが自由に開閉できると、黙つで翌朝帰つてしまう者があるとかだそうだから、何をか云わんやである。

〃暖冬異変ホンコン風邪に攻めこまれ〃

昨年の暮れからの暖冬、時には寒いなあと思う日が入つてくるが、一般的に暖い冬でわれわれ貧乏人には大助り。しかし暖房器具等は売れ行きが悪いとか、これも暖冬の飛ばつちりか。梅も例年より一月も早くほころび気の早い人は寒中から梅見としやれているようだ。ところで暖冬にもかかわらず例年襲つてくるのが流行性感冒。今年は昨年の流感にこりて予防ワクチンを注射してもらつたら、この流感めホンコンの方からの流行児で普通の予防注射では駄目であるとか。まことに世の中は複雑でござるような。

"電灯がピカピカ目下予算中"

暮から、年頭にかけて県庁舎の各部屋は、おそくまで電灯が輝やき不夜城のような感じを呈する。この時期は翌年度の予算偏成や、その説明やいろいろのことがあつて各部課とも大多忙をきわめるのが例年のことである。一仕事を終えて一歩外に出ると寒風が冷たい。ふり返つて見るとまだ各部屋の灯は輝やいているのがこの頃の県庁夜景である。